

きべりはむし

第11巻 第2号

目 次

兵庫県のおオキノコムシ(2)	高橋 寿郎 33
兵庫・神戸を原産地とする甲虫類について(1)	高橋 寿郎 40
武庫川のヒメジュウジナガカメムシ(続報その1)	新家 勝 48
キオビホオナガスズメバチ 千種町に産す	奥谷 禎一 55
ハチ類の方言	奥谷 禎一 56
神戸市山田町の蛾(続報 II)	松本 健嗣 57
神戸市周辺の蜻蛉目付記	松本 健嗣 58
伊丹市内におけるナガサキアゲハの採集および観察記録	新家 勝 59
西宮市内におけるチビサクラコガネの採集記録	新家 勝 60
春先に多いムネアカテングベニボタル	高橋 寿郎 61
コデマリ(小手毬)の花に集るコジマヒゲナガコバネカミキリ	高橋 寿郎 62
クビジロカミキリ神戸市内に産す	高橋 寿郎 63
兵庫県下でのイガラシカッコウの分布	高橋 寿郎 63
ムネアカチビナカボソタマムシ神戸市内に産す	高橋 寿郎 64
イボタサビカミキリ兵庫県下での記録	高橋 寿郎 64
兵庫県産蝶類に関する一番古い文献	高橋 寿郎 66
県関係文献紹介	68
会 員 異 動	69

兵 庫 昆 虫 同 好 会

1983年11月

兵庫県のオオキノコムシ (2)
(兵庫県甲虫相資料・131)

高橋 寿郎

13. *Triplax amoena* Solsky, 1871 アオバチビオオキノコムシ

東シベリア原産である (Horae Soc. Ent. Rossicae, 8:269-278, 1871)。中條博士は *Tritoma* 属の種として日本動物分類 (1936) の時には図説されなかったがその当時の本種の分布は樺太 (小沼) しか知られていなかった。神谷氏は盛岡に近い高洞山麓から採集これを美しい原色で図説された (日本の甲虫, 3巻, 1号, pl. 1, fig. 5, P. 2-3, 1939)。さらに中條博士は青森県青荷温泉附近産で詳しい図説をされた。 (I. C., 3巻, 2号, P. 85-86, 1940)。共に *Tritoma* 属となっている。その後中根博士は本州では北部より山陰にかけて分布するとして図説された (1958, 1963)。属名は *Triplax* である。中條博士の *Fauna Japonica* (1969) の扱も *Triplax* 属である。大変珍しい種と考えられる。

産地: 美方郡扇ノ山 [辻, 1963., 辻, 岸田, 1972]。

14. *Triplax devia* Lewis, 1887 フタホシチビオオキノコムシ

Lewis氏により "Hitoyoshi, Nikko, Miyanoshita" 産で記載された種 (1887)。幼虫は野淵博士の報文がある (1955)。

北海道より九州まで普通に産する種でアラゲカワキタケに集る。近似種とは赤い頭と前胸背の黒紋の形状で簡単に区別することが出来る。県下にも割合多い。

産地: 川西市笹部 [仲田, 1970, 1978]。神戸市山の街 (11 exs., 10-V-1959, 2 exs., 7-VI-1959), 鳥原 (8 exs., 5-VI-1976)。宍粟郡音水 (1 ex., 20-VII-1959), 赤西 (2 exs., 23-VI-1979)。城崎郡三川山 [高橋, 1978]。美方郡扇ノ山 [辻, 1963., 辻, 岸田, 1972]。

15. *Triplax discicollis* Lewis, 1887 セモンチビオオキノコムシ

Lewis氏により "Miyanoshita" と "Kashiwagi" 産で記載された (1887)。中條博士は *Tritoma* 属で記載, 同時に食茸としてツキヨダケ, ブナヘリタケ, ヒラタケを挙げられている (1936)。本州, 四国, 九州に分布しているが山地性のような。県下でも北部地域にのみ記録がある。

産地: 養父郡氷の山 [2 exs., 4-VII-1965, Tsuji leg.]。美方郡扇の山 [辻, 1963., 辻, 岸田, 1972]。

きべりはむし vol. 11, No. 2: 33-40.

16. *Triplax japonica* Crotch, 1873 ホソチビオオキノコムシ

本種は G. Lewis 氏採集による "Nagasaki and Hiogo" 産で記載された種である(1873)。中條博士は *Tritoma* 属で記載(1936)、後再び *Triplax* 属に取扱っておられる(1969)、幼虫は野淵博士のものがある(1955)。

ヒラタケに多く集る。北海道から九州に広く分布し、やゝ普通な種と言われている。兵庫県下でも割合いそうである。特に寒い時季に多く見られる。

産地：Hiogo [Crotch, 1873]。神戸市六甲山 [中條, 1940]、烏原(10 exs., 20-XI-1980, 4 exs., 21-XI-1980)、藍那(1 ex., 10-VI-1978, 7 exs., 24-X-1978)、下谷上(4 exs., 7-XI-1979, 1 ex., 9-XI-1979)。豊岡市大岡山 [高橋, 1975]。美方郡扇ノ山 [辻, 岸田, 1974]。

17. *Triplax sibirica connectens* (Lewis, 1891) シベリヤチビオオキノコムシ

Lewis 氏によって奈良の一軒茶屋産で *Cyrtotriplax connectens* として記載された(1887)、Reitter 氏は R. Hiller 氏の日本に於ける採集品で *T. gracilentata* Solsky を記録(Deut. Ent. Zeit. XXIII, Heft. 2, 1879)、後 Lewis 氏も野渡にて柳に寄生していた茸から 6 exs. 採集(22-VI-1880) したと記録している(1887)。中條博士も *Tritoma gracilentata* として独立種にこの種を取扱っておられる。一方この *connectens* を *Tritoma* 属で記録された(1936)。中根博士は *Triplax connectens* 及び *T. sibirica* を夫々独立種として取扱れた(1958)。

Delkeskamp 氏はこの *connectens* Lew. 1887, *gracilentata* Lew. 1887, *gracilentata* Heyden, 1887 (Amurland) のいずれもが *Triplax sibirica* Crotch, 1876 (Lake Baikal) のシノニムであることを発表され *connectens* を *sibirica* の亜種とされた (Ent. Rev. Japan, 10 卷, 2 号, P. 39-41, 1959)。

その後中條博士も *Triplax sibirica connectens* の取扱をしておられる(1969)。

分布は広くシベリア、満州、北支、朝鮮、日本では北海道から屋久島まで普通に見られると言うことであるが、兵庫県下からほとんど知られていない。ヒラタケの類に来ている。

産地：神戸市藍那(10 exs., 24-X-1978)。美方郡扇ノ山 [辻, 1963., 辻, 岸田, 1929, 高橋, 1975]。

18. *Pseudamblyopus similis* (Lewis, 1887) ヒメスネビロオオキノコムシ

Lewis 氏が "Nikko & Kashiwagi" の産で *Cyrtotriplax* 属で記載された種(1887)。中條博士は *Tritoma* 属で図説された(1936)。荒木東次氏は 1942 年に本種は *Pseudambly-*

yo pus 属に扱うべきだとの報文を發表された (Ent. World, 10 卷, 98 号, P. 225-226, 2 figs., 1942)。現在勿論この属の種とされている。中根博士 (1958, 1963), 中條博士 (1969) の図説がある。分布は北海道, 本州, 四国である。

兵庫県下では次の記録を知るのみである。

産地: 美方郡扇ノ山 [辻, 多田, 1972]。

19. *Neotriplax atrata* Lewis, 1887 クロハバビロオオキノコムシ

Lewis 氏が "Japan: in all islands" として記載された (1887)。中條博士 (1936, 1969), 中根博士 (1958, 1963) の夫々図説がある。分布は日本全土 (北海道, 本州, 四国, 九州)。

主として山地のカワラタケ, カイガラタケ類にみられる種である。

県下でも中央から北の方に分布している。

産地: 宍粟郡音水 (1 ex., 11-VI-1972), 坂の谷 (1 ex., 22-VII-1979)。美方郡扇ノ山 [辻, 1963., 辻, 岸田, 1972]。

20. *Neotriplax delkeskampii* Nakane, 1961 コクロハバビロオオキノコムシ

中根博士が奈良-春日山, 東京-奥多摩, 三重-湯ノ山, 長野-島々谷の産でもって記載された種 (Fragm. Col. Pars. 1, P. 4, 1961)。前記 *N. atrata* に似ている種である。図説は中根博士 (1963), 中條博士 (1969) がされている。現在の所本州にのみ産する種である。

兵庫県下の記録は無かった。赤西で採集したものがこの種に該当すると考えられる。

産地: 宍粟郡赤西 (1 ex., 9-IX-1978)。

21. *Neotriplax lewisi* (Crotch, 1873) アカハバビロオオキノコムシ

G. Lewis 氏が採集した長崎, 一本木産で Crotch 氏によって *Cytotriplax* 属でもって記載された種である (1873)。Lewis 氏はその後 *Neotriplax* 属として取扱われた (1887)。

日本では普通に産するオオキノコムシでよく知られている。カワラタケ, カイガラタケなど多孔隙菌に集まり成虫越冬で神戸あたりでは冬季 1~3 月頃でも見ることが出来る。図説も多くある。蛹に就いては高千穂, 安松氏の報文 (1938), 幼虫は野淵博士 (1954) が図説しておられる。

産地: 川西市笹部 (4 exs., 9-IV-1978) [仲田, 1978]。神戸市六甲山 (1 ex., 18-V-1967), 烏原 (8 exs., 2-I-1972, 1 ex., 1-XI-1975, 6 exs., 16-XI-1975, 1 ex., 19-III-1980, 2 exs., 25-III-1980), 山の街 (4 exs., 22-V-1949, 1 ex., 20-III-1977, 7 exs., 15-X-1977), 下谷上 (11 exs., 16-VI-1979), 藍那 (3 exs., 22-V-

1978)。明石市明石公園(1ex, 9-V-1978)。多可郡三谷(1ex., 24-V-1975)。宍粟郡赤西(1ex., 23-V-1979)。氷上郡[山本, 1958]。美方郡扇ノ山[辻, 1963, 辻, 岸田, 1972]。

22. *Rhodotritoma sufflava* (Lewis, 1887) キイロチビオオキノコムシ

Lewis氏によって *Triplax* 属で "Nikko, Chiuzenji & Shingu in Yamato" 産で記載された(1887)。中條博士は *Tritoma* 属で図説された(1936)。荒木東次氏は本種が *Rhodotritoma* 属の種であるとされた(1942)。

1975年に I. Khnzorian氏は *Tritoma fulva* (Reitter, 1879) = *Rhodotritoma sufflava* (Lewis, 1887) と両者のタイプを調べられて同一種だとされ *Tritoma* 属のものであるとされた。

中根博士はこの考え方を紹介されると共に(1976), どうも *Tritoma* 属のものでないようで *fulva* が真に *sufflava* と同じかどうかは疑わしいと述べておられる。一応此処では *Rhodotritoma* 属の種として扱っておく(中條博士も同様に取扱っておられる, 1969)。ヒラタケ, ハナガサタケが食草として知られている(中條, 1969)。県下では大変少ない種のように神戸市内で採集しただけである。

産地: 神戸市藍那(1ex., 9-VII-1979)。

23. *Tritoma pallidicincta* (Lewis, 1887) キベリハバピロオオキノコムシ

本種は Lewis 氏が "Japan: Fukushima (1881年6月)" 産でもって *Neotriplax* 属で記載された(1887)。

割合記録の少なかった種であるが久松定成氏はその分布と食性について述べられ出現期が5月より6月初旬で発生期が短いため案外人に知られていないのではないかと記しておられる(新昆虫, 3巻, 4号, P.144-145, 1950)。中根博士(1958, 1963), 中條博士(1969)の夫々図説がある。

中條博士は *Tritoma* はオオキノコムシではなかったとして *Cyrtotriplax* 属を使用された。即ち *Tritoma Fabricius, 1755* = *Cyrtotriplax Crotch, 1873* との扱をされた(1969)。この両属のタイプ種は同じイギリス産 *Tritoma bipustulata Fabricius* である。

併し *Tritoma* は Reitter 氏の述べた(1887) オオキノコムシでも用いられずにオオキノコムシとして用いられている。I - Khnzorian 氏も *Tritoma* 属を用いており *Neotriplax Lewis, 1887* 属もこの属にふくめているとのことである(中根, 1976)。

本報文では従来通りの *Tritoma* 属として取扱った。

本種の食茸としてはカイガラタケ、チャミダレアミタケ、チャカイガラタケ、ハチノスタケが挙げられている（中條，1969）。

県下での記録が全くなかった。筆者は7月初めハチノスタケにきているのを神戸市内で採集することが出来た。

産地：神戸市藍那（4 exs., 9-VII-1979）。

24. *Tritoma discalis* (Lewis, 1887) ヒシモンチビオオキノコムシ

Lewis氏により "Nikko & Kashiwagi" 産で *Cyrtotriplax* 属で記載された（1887）。

本種の斑紋は割合はっきりしているので区別はそれ程難しくない。たゞ良く似た斑紋の種が何種類かいてそれらの関連において再検討を要すると中根博士は述べておられる（1958）。

図説は中條博士（*Tritoma* 属，1936., *Cyrtotriplax* 属，1969），中根博士（*Tritoma* 属，1958, 1963）のものがある。

食茸としてカイガラタケ，カワラタケ，ウチワタケ，コルクタケが示されている（中條，1969）。

県下では少ない種のように氷の山で採集した。

産地：養父郡氷の山（1 ex., 2-VII-1953）。

25. *Tritoma pallidiventris* (Lewis, 1887) アカハラチビオオキノコムシ

Lewis氏によって "Chiuzenji" 産で *Cyrtotriplax* 属で記載された（1887）。図説もされている（中條，1936, 1969, 中根，1958, 1963）。

本州，四国，九州の山地帯に産するが多くないと，アシグロタケ，ウチワタケ類を食すると，県下では扇の山でしか記録がない。

産地：美方郡扇ノ山〔辻，1963., 辻，岸田，1972〕。

26. *Tritoma rufipennis* Lewis, 1887 ベニバネチビオオキノコムシ

Lewis氏によって "Rakuwayama, near Hitoyoshi (3-V-1881)" 産で *Cyrtotriplax* 属で記載された（1887）。

本種も図説がそれぞれある（中條，1936, 1969, 中根，1958, 1963）。食茸としてウチワタケとコフキササルノコシカケが挙げられている（中條，1969）。北海道，本州，四国，九州の山地帯にいる種だが余り多くないとのことである。兵庫県下でも次の産地が知られているだけである。

産地：相生市三瀬山（1 ex., 28-IV-1974）。

27. *Tritoma maculifrons* Lewis, 1887 ミツボシチビオオキノコムシ

Lewis氏によって "Oyama (25-V-1880) & Higo (1881年春)" 産で *Cyrtotriplax* 属で記載された種である。割合斑紋がはっきりしているが *discalis* に良く似た所もあり検討を要すると述べられている (1958)。中條博士 (1936, 1969), 中根博士 (1958, 1963) の図説がある。この種には紀伊半島に産する subsp. *pseudodiscalis* Nakane (Fragm. Col., Pars. 1:5, 1961) がある (上翅紋の合一したもの *T. discalis* に良く似た斑紋である)。

近畿地方には多い種とのことであるが分布は本州, 四国, 九州である。食茸としてカイガラタケ, カワラタケ, コフキササルノコシカケ, カワウソタケが挙げられている (中條, 1969)。

県下では従来余り産地が知られていなかったが神戸市内押部谷町で褐色の茸に割合来ていた。

産地: 川辺郡猪名川町木間生 [仲田, 1978]。神戸市摩耶山 [柴内, 中畔, 1950], 押部谷町木見 (4 exs., 16-VII-1980, 3 exs., 3-VIII-1980, 4 exs., 7-VIII-1980, 2 exs., 24-VIII-1980)。

28. *Tritoma nigropunctata* (Lewis, 1887) ツマグロチビオオキノコムシ

Lewis氏により "Miyanoshta" 産で *Cyrtotriplax* 属で記載された (1887)。本種も斑紋が割合とはっきりとしている。中條, 中根両博士の図説がある (1936, 1958, 1963, 1969)。別に中條博士は谷口 (黒佐) 和義博士が箕面で採集された標本に基いて詳しい図説をしておられる (日本の甲虫, 3巻, 2号, P. 87-89, 1940)。

分布は本州と九州であるが中根博士は北海道で採集された旨記しておられる (1958, 多分新種か新亜種になるものかとの註がついている)。全般に少ない種とされていて兵庫県下でも次の記録を知れるのみである。

産地: 宍粟郡波賀町原 [1 ex., 27-VI-1971, H. Hatanaka leg.]。

29. *Tritoma niponensis* (Lewis, 1874) クロチビオオキノコムシ

本種は Lewis氏によって "Hiogo - near Maiyasan Temple" 産で *Cyrtotriplax* 属で記載された (1874)。黒色で光沢があり北海道から九州まで広く産する普通種。東シベリアにも分布していると, 図説も多くある (中條, 1936, 1969, 中根, 1958, 中根, 1958, 1963)。幼虫, 蛹に就いての報告もある (新村, 1939, 野淵, 1955)。

食茸としてシイタケ, シュタケ, カイガラタケ, チャカイガラタケ, アラゲカワラタケ, カワラタケが知られている (中條, 1969)。

兵庫県下でも極めて多くいる種である。

産地：川辺郡猪名川町槻並（1 ex., 4-V-1979）。川西市大和，笹部〔仲田，1978〕，笹部（5 exs., 9-IV-1978）。神戸市摩耶山〔Lewis, 1874〕，鳥原（5 exs., 11-VI-1967, 2 exs., 29-IV-1969），箕谷（6 exs., 5-IV-1975），藍那（1 ex., 22-V-1978, 1 ex., 7-VI-1978）。多可郡三谷（5 exs., 19-IV-1975），鳥羽（19 exs., 29-IV-1972），白山（2 exs., 3-V-1973）。相生市三濃山（4 exs., 28-IV-1974, 9 exs., 16-VI-1974, 1 ex., 18-V-1974）。佐用郡大撫山（10 exs., 2-V-1978）。宍粟郡赤西（2 exs., 27-V-1979, 1 ex., 3-VI-1979），音水（2 exs., 20-VII-1959, 2 exs., 10-V-1970），坂の谷（1 ex., 22-VI-1979）。氷上郡〔山本，1958〕。美方郡扇ノ山〔辻，岸田，1963., 高橋，1975〕。

30. *Tritoma sobrina* (Lewis, 1887) ベニモンチビオオキノコムシ

Lewis氏により "Japan" とのみで産地を明示されないまゝ *Cyrtotriplax* 属で記載された（1887）。比較的斑紋もはっきりして見分けやすい種である。図説も中條，中根両博士のものがある（1936, 1958, 1963, 1969）。

幼虫に就いては野淵博士がのべておられる（1955）。日本の本州，四国，九州に分布し，主に山地に多い種であると，食茸はカイガラタケ，チャミダレアミタケ，ミダレアミタケ，アラゲカワラタケ，カワラタケ，ミカワタケ，キクラゲ等多くが挙げられている（1969）。

兵庫県下でも多くいるが県の中央部近くから北にいるようで南側海岸線沿いの地域には記録が無い。

産地：多可郡三谷（6 exs., 19-IV-1975），鳥羽（32 exs., 29-IV-1972）。宍粟郡赤西（8 exs., 27-V-1979）。養父郡氷の山（6 exs., 25-VII-1959）〔高橋，1975〕。美方郡扇ノ山〔辻，1963., 辻，岸田，1972〕。

Subfamily Cryptophinae

31. *Cryptophilus obliteratedus* Reitter, 1874 ヒラナガムクゲオオキノコムシ

Reitter氏によって日本を産地に記載された種である（Verh. zool.-bot. Gen. Wien, 24:382, 1874）（次種 *propinquus* と共に G. Lewis氏が長崎で採集したものであるとのこと，中根，1958）。中根博士によって図説されている（1956, 1958, 1963）。古木の皮下などにみられ，燈火に飛来することがあると（中根，1958）。

県下の記録は次の所があるのみである。

産地：津名郡常隆寺山〔1 ex., VII-1972, 久松，1973〕。

32. *Cryptophilus propinquus* Reitter, 1874 ヒメムクゲオオキノコムシ

Reitter氏によって "Japan" 産で記載された(1874)。中根博士によって図説されている(1958, 1963)。

分布は本州, 四国, 九州, 台湾となっているが, 小さい種(体長 3.2mm)なので見つけにくいのかも知れない。神戸市内でピットホールトラップに入ったのが採集出来ている。

産地: 神戸市須磨・妙法寺(1ex., 11-XI-1978, 1ex., 7-XII-1979, 1ex., 27-II-1979)。

以上, 兵庫県産オオキノコムシ科 32種の記録をしたが始めに記したようにまだまだ不十分で, もっときめ細い調査をしなければいけないと思うし, そうすればもっと産する種も増加することだろうと考えている(本州産の半数以上は産するように思われるのだが—)。

(May, 1983)

追 記

1983年中根博士によって鹿児島産2新種が記載された(Frag. Coleop. Pars. 35/37: 144-145, Fig. 18, 19), そして従来 *Tritoma basalis* Lewis, 1887 ネアカチビオオキノコムシは既に北米産 *T. basalis* Lacordaire, 1842 があるので新に学名に *T. lewisianus* Nakane が命名された。之で日本産オオキノコムシ科は始めに紹介したものに2種が加わって98種になる。尤も本州産は77種のまゝである。

兵庫・神戸を原産地とする甲虫類について (1)

(兵庫県甲虫相資料・133)

高 橋 寿 郎

江戸末期に洋学の知識が入ってくるとともに日本を訪れる欧米人も多くなり各種の学問がこれら欧米人によって発展を始めた。

日本の昆虫学の発展もこれ等欧米人によってその基礎がきづかれたことは衆知のことである。

兵庫, 即ち神戸も兵庫の港として古く開けたので欧米人の来訪者の多くが兵庫に立寄り, 或いは滞在して昆虫の採集をしたりし, その関係で兵庫に関する昆虫の研究も日本の昆虫の研究とほぼ同じ位の時代から知られていることになる。したがって兵庫(Hiogo or Hyogo)を原産地とする昆虫は数多く記載されている。

当時の兵庫は勿論、兵庫県の兵庫でなく兵庫港の兵庫を表現しているわけで現在の神戸市兵庫区から東須磨あたり迄が兵庫であり、東は神戸村であった。神戸という名は1879年4月に従来の神戸村と坂本村及び兵庫村が合併したことに始まっている。

G. Lewisの第1回の日本滞在中(1864~1872)の採集品が日本の甲虫の研究の基礎(同時に兵庫県の甲虫の研究の基礎)となっていることは良く知られているが、HiogoばかりでなくKobeという名も出てくる。その区別は上記した区別によっているが、共に現在の神戸市内にあたる所を意味している。ほとんど未開の地であり現在とはくらべものにならない自然状態であった(例えば今手許にある明治2年版兵庫港地図などを見ると人の住んでいる所は現在の兵庫区にある中央卸売市場を中心とした地域である。1983年7月の神戸市は面積543.57㎏、人口1,392,240人)。最近神戸の英字新聞ジャパンクロニクル社が大正7年(1918)に“Jubilee Number 1868-1918”を編集・発行したのを訳したものが“のじぎく文庫”から“神戸外国人居留地”と題して出版された(1980)。その中で兵庫開港(1868年)当時の神戸の様子(兵庫は兵庫港として湊川から西の地としている)を説明している。“川崎の突端から生田までの海岸は見渡すかぎり一面の砂浜で、そのなかに布引の滝から流れている小さな川があって海に注いでいた。当時の神戸は湊川にかゝる橋の上から生田神社の参道までつゞく曲りくねった細長い町で……”。生田神社の周辺は野原で冬の陽ざしをうけ荒涼としていた。背後には諏訪山をはじめとする丘陵が連なり、木がこんもり茂っているのもあれば地肌が露出している丘もあってそのうしろから海拔2500フィートの摩耶山が頂上を見せていた。摩耶山の東側には後年避暑地となり、また日本で最初のゴルフ場が造られることになる六甲山がそびえていたと。また布引の滝は雄大で美しく、芸術家が訪れるのにふさわしい小型のナアイアガラだと。摩耶山の杉の大森林はレパノンの例の巨大なヒマラヤ杉よりこちらの方が立派であるとほめ、摩耶山上の天上寺周辺の森にはたくさんのシカが生息していて摩耶山と居留地の内で日本でこれまで見たこともないような大きなシカを仕留めた。神戸の裏山でもシカを仕留めた。またサルが群れが遊んでいるのが裏山で見られたと。とに角ルイスが兵庫で採集した頃の兵庫・神戸には人の住んでいる所はごく僅かで、その大部分が自然のままであった様子がよくうかゞえる(拙宅の近所も人家のほとんど無い地であったようである)。そこでこれ等の地で採集されたもので新種として発表されたものでもその後全く採集されないものもあれば、はたして兵庫・神戸からのものであろうかとの疑いをもちたいものも含まれていたりする。一々全部に就いての検討は出来なかったが、一応手許にある文献でこれ等兵庫・神戸を原産地(その総てにわたりTypeに関する記載は無い。したがって記載時に使用した標本の産地と言う意味になる)として発表された昆虫類の中から甲虫類だけを取り出して分類順に検討、現在の産出状況も出来るだけ簡単に解説して見ることにした。学名は現在使用されているものにする様にしたが、浅学未熟のためよくわからない種も結構多くあり、その点では大変不十分な収録のしかたとなっている。特にハネカクシ科の分類に就いては良くわからないのに多数の種が

あるので、そのまま記録しておいた（新種記載以外兵庫・神戸から記録された甲虫類も之また大変多くある。今回はこれ等の種に就いての言及は一切していない）。

収録範囲は大体日本人による日本の甲虫の分類学的研究が始った大正10年（1921）頃迄のものを取扱ったが、一部神戸に在住したJ・E・A・Lewisの採集品に基くCameronの論文（1930年、昭和5年、1933年、昭和8年）もふくめた（引用文献に就いては拙著“兵庫県産甲虫類に関する文献目録、改定版、1981年”を参照して頂きたい）。

今回ここに収録した種は全部で46科346種となる。その内、割合多く含まれているグループは次の通りである。

オサムシ科 55種、ハネカクシ科 78種、コガネムシ科 21種、ゴミムシダマシ科 17種、カミキリムシ科 25種、ハムシ科 21種。そして原記載以後県下での記録の見られない種が84種ある（内ハネカクシ科だけで50種。筆者が見得た文献上での記録が見られなかったもので見落しているのがあるかも知れない。それ等に就いて御教示頂きたい）。

やはり問題となるのは同定の間違と産地の不確なことである。

記載者、記録者が採集者で無いのが多いことから生態的な記述がほとんどないし、産地も大変漠然としているのが多い。データもほとんどついていない。その意味からは大変不十分なものと言わざるを得ない。分類学的には研究の進展と共にその取扱が変ってくるもののあるのは止むを得ることである。

併しながら、自然状態が変ってしまっているとは言え、その当時採集され記載された甲虫類についてその後全く調査の手がつけられていないものが多くある。案外と身近に棲息しているかもしれないこれ等虫たちの調査が等閑視されている現状が大変淋しい（John. E. A. Lewis氏が神戸で採集された多くのハネカクシ科標本でCameronが新種記載をされているが、それらの産地、Shinohara - 篠原, Gomo - 五毛, Ueno - 上野, Oishi - 大石, Harada - 原田, Cascade Valley 摩耶山と六甲山間の袖谷等々はいづれも現神戸高校付近でこのあたり比較的開発がされていないように思われる。J. E. A. Lewis氏の採集されたハネカクシ類は現在も元気にいると考えられる）。

また他方では、県下の甲虫たちの分布調査が現在でもほとんど出来ていないと言う点も忘れてはならないと考える。

可成り長文になるので何回かにわけて発表させて頂くことにしたい。

1.** *Eustra japonica* Bates, 1892 エグリゴミムシ

Lewisが1896年に*Eustra batesi* Lewisとして新種記載をした。九州では石の下とか朽ちた樹の樹皮下に普通におり、しばしば群居すると。またKashiwagi及びMaiyasan near Kobeでも得たとある。兵庫県下での記録は必ずしも多くない。尚LewisはBatesが*Eustra plagiata* var. *japonica* Bates, 1892 としているが異るとしている。*E. plagiata* Schmidt - Gobel とは異なるが、現在上記学名が用いられている。

1. *Calosoma maximowiczi* (Morawitz, 1863) クロカタビロオサムシ

Batesにより(1873)*Calosoma mikado*なる新種記載をHiogo産の1♂でされた(栗の樹上で得たと)が学名は上記となる。鱗翅類の幼虫を捕食するのでクスギの樹上にいることが多い。現在での県下での個体数は必ずしも多くない。

2. *Carabus (Ohomopterus) insulicola maiyasanus* Bates, 1873 マヤサン
オサムシ

神戸の標高2000フィート摩耶山の天上寺(Moon - temple)においてのみ見出されるとして*Carabus Maiyasanus* Bates, 1873 と命名記載されたが、学名は現在上記のごとくになる。本種は県下には可成り広く分布し場所によっては個体数も大変多い。

3. *Carabus (Ohomopterus) yaconinus* Bates, 1873 ヤコンオサムシ

Hiogo. 県下に普通に産す、特に市街地に近い所に多い。中根博士によると本種の学名は変らなくてはならないかもしれない(1977)。

4. *Nebria macrogona* Bates, 1873 オオマルクビゴミムシ

Hiogo. 多いとある。記録は割合あるが現在の産出状況は一寸わからない。

5. *Nebria pulcherrima* Bates, 1873 フタモンマルクビゴミムシ

Hiogo. この種も余り記録は無く、また現在の産出状況がよくわからない。

** 科ごとに種には便宜的に番号をつけた。

6. *Scarites terricola pacificus* Bates, 1873 ナガヒョウタンゴミムシ
 Hiogo. 日本の Hiogo, Nagasaki の粘土質の地では普通にいる種と思われる。当初 *S. pacificus* として独立種で記載されたが、現在は上記の学名で取扱われている。
7. *Clivina lewisi* Andrewes, 1927 クロヒメヒョウタンゴミムシ
 神戸が原産地で J. E. A. Lewis の採集品によると (中根, 昆虫と自然, Vol. 13, No. 1 : 6, 1978)。柴内, 中畔両氏によると神戸市近郊にはかなり産するようで、砂地の石下等に棲息していると (1950)。
8. *Clivina niponensis* Bates, 1873 ヒメヒョウタンゴミムシ
 Hiogo. 本種の記録も今迄ほとんどなかったが、最近神戸市須磨・妙法寺でピットフォールトラップによる採集で割合得られた。案外いるのかもしれない。
9. **Dyschirius ordinatus* Bates, 1873 チビヒョウタンゴミムシ
 Hiogo. 多く得たとある。
10. **Dyschirius Hiogoensis* Bates, 1873 コチビヒョウタンゴミムシ
 Hiogo. 多く得たとある。
11. **Dyschirius sphaerulifer* Bates, 1873 マルクビチビヒョウタンゴミムシ
 Hiogo. 2匹得たとある。
Dyschirius 属上記3種はいずれも Hiogo 産で Bates により新種記載されている。併し2種に就いては多く得たとある。ところがその後全く採集出来ていない。海岸線とか河川の状況が変わってしまった現在、はたしてこれ等の種が県下に分布しているかどうか大変興味のある問題である。
12. *Perileptus japonicus* Bates, 1873 ホソチビゴミムシ
 Hiogo. 余り分布が知られていない。
13. *Trechus ephippitatus* Bates, 1873 ヒラタキイロチビゴミムシ
 基本型は長崎産で変種を兵庫から得たとある。割合県下に広く分布しているようである。

* 印, 原記載以後兵庫県から記録のみられない種。

14. *Bembidion (Blepharoplataphus) hiogoensis* (Bates, 1873)

ヒョウゴミズワゴミムシ

兵庫の砂地と神戸の浜でも得たと。*Bembidium (Peryphus)* 属で記載されている。余り採集例が無い。

15. **Bembidion (Peryphus) consummatum* (Bates, 1873) アトキミズギワゴミムシ

神戸の浜で得たと。*Bembidium (Peryphus)* 属で記載されている。この種は本州から九州まで分布しており、川原の石の下などから見出されるとある。兵庫県から Bates の記載以後記録が見られなかったが、多分調査不充分のためだと思われる。

16. *Bembidion (Trichoplataphus) lissonotum* (Bates, 1873)

オオアオミズギワゴミムシ

兵庫の砂地で得たと。*Bembidium (Peryphus)* 属で記載されている。川辺、川原に多いということであるが、県下の分布は余り知られていない。

17. *Perigona (Trechius) nigriceps* Dejean クロズホナシゴミムシ

Perigona tachyoides Bates, 1883, Kobe として記載されている。場所によっては多く産するようである。

18. *Trigonotoma lewisi* Bates, 1873 ルイスナガゴミムシ

Hiogo. 県下では割合多く産する。

19. *Pterostichus (Argutor) longinquus* Bates, 1873 コホソナガゴミムシ

Hiogo. 県下での記録は案外少ない。

20. *Pterostichus (Eosteropus) prolongatus* Morawitz オオクロナガゴミムシ

Hiogo. *Pterostichus (Steropus) tropidurus* Bates, 1873 として新種記載されたものであるが、県下での記録は少ない。

21. *Pterostichus sphaeriformis* Bates, 1873 ヒョウゴナガゴミムシ

Hiogo. 4匹得たとある。県下中央部より北に記録はある。中根博士によると現在採集されるもので、この種とされるものは♀上翅に光沢がなく原記載に合致しないと。大英博物館所蔵の

type 標本の写真と腹端部とを示しておられる (1983)。

22. *Platynus (Pseudoplatynus) magnus* (Bates, 1873) オオヒラタゴミムシ
Anchomenus (Limodromus) 属で記載。Hiogo. 広く産するようである。
23. *Agonum (Agonum) chalcomus* (Bates, 1873) アオグロヒラタゴミムシ
Anchomenus (Agonum) 属で記載。Hiogo. 広く産するようである。
24. *Agonum (Glaucogonum) sylphis* (Bates, 1873) キンモリヒラタゴミムシ
Colpodes 属で記載。Hiogo. 2匹得たとある。余り産地が知られていない。
25. *Agonum (Lissagonum) lampros* (Bates, 1873) コハラアカモリヒラタゴミムシ
Colpodes 属で記載。Hiogo. 多しとある。広く分布しているようである。
26. *Agonum (Cyrochaetostylus) atricomus* (Bates, 1873) クロモリヒラタゴミムシ
Hiogo. いくらか得たとある。*Colpodes* 属で記載。割合いる種のものである。上記3種の
取扱は土生博士 (1978) による。
27. *Pristosia aeneola* (Bates, 1883) ホソヒラタゴミムシ
Eucalathus aeneolus, Hiogo として記載されている。割合いそうである。
28. **Parabrosicus crassiplpis* (Bates, 1873) フトクチヒゲヒラタゴミムシ
Taphria 属で記載。Hiogo. 1匹得たとある。その後全く記録が無い。Habu 博士の図説があ
る (1978)。
29. *Synuchus (Synuchus) callitheres* (Bates, 1873) キアツヤヒラタゴミムシ
Dolichus 属で記載。Hiogo. 1匹得たとある。割合いそうである。
30. *Synuchus (Synuchus) dulcigradus* (Bates, 1873) ヒメツヤヒラタゴミムシ
Pristodactyla 属で記載。Hiogo. 余り多くないようである。

31. *Amara (Celia) chalcophaea* Bates, 1873 コアオマルガタゴミムシ
Hiogo. 多しとある。その後の記録は余りない。
32. **Amara (Celia) laticapus* Bates, 1873
Hiogo, 2頭得たとある。その後の記録が全く無い。
33. *Bradytus ampliatus* Bates, 1873 キアシマルガタゴミムシ
神戸の砂丘で得た, 黒い変種もまた兵庫で得たとある。割合いそうである。
34. *Curtonotus hiogoensis* Bates, 1873 ヒョウゴマルガタゴミムシ
Hiogo. 割合いそうである。
35. **Harpalus (Acardystus) rubefactus* Bates, 1873 アカゴモクムシ
Hiogo. 本種もその後の記録がない (Habu, 1973)。
36. *Harpalus (Harpalus) chalcetus* Bates, 1873 ツヤアオゴモクムシ
Hiogo. 余り多くいる種ではなさそう。
37. *Harpalus (Acardystus) platynotus* Bates, 1873 ヒラタゴモクムシ
Hiogo. 余り多くいる種ではなさそう。
38. *Platymetopus flavilabris* (Fabricius) カラカネゴモクムシ
Platymetopus corrosus Bates, 1873 Hiogo として記載された種である。割合
いる。
39. *Dicheirotichus tenuimanus* (Bates, 1873) キベリチビゴモクムシ
Trichocellus 属で記載。Hiogo. 記録がほとんどない。
40. *Bradycellus (Tachycellus) subditus* (Lewis, 1879) コクロヒメゴモクムシ
Tachycellus 属として記載。Hiogo. 沼地には普通にいとされている。記録の方は割合少
ないようである。

41. *Stenolophus (Stenelopus) iridicolor* Redtenbacher ツヤマメゴモクムシ
Stenolophus chalceus Bates, 1873 として Hiogo 産で記録された種が本種であると(大倉正文氏の御教示による)。1匹得たとあるが県下に広く分布している。
42. *Diplocheila (Diplocheila) elongata* (Bates, 1873) スナハラゴミムシ
 Rembus 属で記載, Hiogo. 県下での海岸線が変ってしまっている関係かそれ程多く見られない。
43. *Chlaenius (Chlaenius) ocreatus* Bates, 1873 クロヒゲアオゴミムシ
 Hiogo. 割合産する。
44. *Oodes vicarius* Bates, 1873 オオトックリゴミムシ
 Hiogo. 余り採集例は無い。
45. *Lachnocrepis (Eulachnocrepis) prolixus* Bates, 1873 トックリゴミムシ
 Hiogo. 割合広く分布している。

(オサムシ科未完)

武庫川のヒメジュウジナガカメムシ (続報 その1)

新 家 勝

I はじめに

武庫川におけるヒメジュウジナガカメムシ(以下、本種と言う)の分布および生態について1981年に観察した結果を本誌第10巻第1号に中間的に報告したとき多くの未観察の部分を残していた。1982年も引続き本種の生態観察を続けたところ、更に多くのことが分かったので報告する。

II 観察結果

(1) 1982年の発生概況

1982年には武庫川川敷内の10箇所では本種の発生が見られた。このうち新たに発生が見られた場所は4箇所、引続いて発生が見られた場所は3箇所、放虫により発生したと思われる場
 きべりはむし, vol.11, No.2:48-55.

所は3箇所であった。ガガイモについても新たに生育が見られた場所が8箇所あり、内3箇所に本種の発生が見られた。

1981年に大発生があった伊丹市西野(天神川合流点附近)では大発生は見られなかった。ガガイモの最大群生地であるのに1981年には発生が見られなかった西官市戸崎町では、1981年に伊丹市西野で見られたような大発生が見られた。ただし、1982年1月に伊丹市西野のごみ投棄場所で捕獲し、保護していた約100頭を5月上旬に放虫したのから発生したものと思われる。1981年に発生が見られたにもかかわらず、1982年にガガイモの生育が悪かった所、不法耕作や河川工事のためガガイモが全滅または極度の被害を受けた所では発生が見られなかった。

なお、武庫川以外では、支流である支多々川を合流点から約300メートルさかのぼった市街地中の空地および武庫川堤防から約500メートル離れた安倉中の池の堤防において発生が見られた。食草はいずれにおいてもガガイモであった。

(2) 越冬状況

既報の通り晩秋から初冬にかけて本種はいろいろな場所で越冬態勢にはいって行く。1982年1月以降、新たに確認した越冬場所は次の通りである。

薄い石の下、アレチウリの落葉中、ススキの枯葉下、禾本科雑草の根際、倒木の南面の樹皮下、護岸コンクリートの割れ目、次のようなごみの周辺(タイルの破片、薄い板切れ、空罐、バイク用タイヤの下、電気掃除機の隙間、断熱材中、断熱材とベニア板の隙間)。

以上の内、ごみ以外は、人工的な環境でなく、自然状態における本来の越冬場所であると思われる。いずれも日当たりがよく、また雑草に覆われていたり、北側若しくは西側が土手になっているため風当りの少ない場所でもあった。

そして、比較的薄いものつまり日光が当たると熱がよく伝わり、その内部または下面まで暖くなるものの中または下で越冬していることが多かった。トビイロサングメがよく越冬しているような厚みのある石下では越冬しておらず、バイク用タイヤ、大型の空罐など比較的厚みのあるものでは日当りのよい南面の下側で越冬していた。このような越冬場所の内、スペースの狭い所では単独または小数で越冬しており、広い所では群棲し、ときには団子状の塊りをなしていた。昼間に観察したところでは、仮死状態のような極めて動きに乏しいものではなく、発見されるとぞろぞろと歩き出し、越冬場所を奪われると、新しい越冬場所を求めて歩き去った。1月、2月の厳冬期においても、晴天でかつ、風のない昼間には、小数の成虫が越冬場所の表面で日光浴をしていることがあった。

越冬している群の個体数もかなりな数になる。西官市上大市5丁目の草むら中に捨てられた新聞紙中に大群が越冬していたので、その個体数を1982年2月20日に数えたところ1351頭に及んだ。新聞紙ごと容器に取り込み、容器から脱出する個体を1頭ずつ、実に4時間かけて数え

た。なお、新聞紙の下にいたものは取り逃したので、この大群の個体数は更に多かったものと言える。また、雌雄による体の大きさの相違のみに着目して識別したところ、内訳は♂708頭、♀643頭であった。交尾器を調べて識別したのでないから、正確な内訳とは言えないが、雌雄が各半数を占め、少しばかり雄が多かったと言っても間違いはないと思う。なお、この場所では越冬後の交尾期においてもやゝ雄が多く、交尾の中へ割り込もうとする行動がしばしば見られた。また、体の乾燥具合と固さからみて容器への取込み前からの死体と思われるものが3頭、容器への取り込み後の損傷によると思われる柔軟な死体が16頭あった。計数後はほぼ元通りに新聞紙内に戻しておき、全数がこの場所を離れた後の4月18日に調べたところ、更に21頭の死体が見付かった。これらは個体数を数えたときの損傷により後日、死亡したものと思われる。

(3) 越冬後の出現

1月および2月の厳冬期には越冬場所が荒されるなどの外乱が加わらない限り、越冬場所を離れないが、3月にはいり暖い日があると少しずつ越冬場所を離れるものが出て来る。越冬中の個体数を数えた前述の場所ではその直後、多数の個体がこの場所を離れたのではあるが、2月27日、3月3日および3月13日には当初の半数程度の個体が残存していた。ところが、3月19日には更に半数程度に減少し、3月22日には十数頭が残存するだけになった。また、3月21日には伊丹市西野において空罐下で越冬していた約30頭の群が半減しており、ここを離れたと思われる十数頭が約20cm離れた雑草上で日光浴をしていた。3月11日以降、大阪および神戸の最高気温は15℃を、最低気温も6℃を超える日が多く、3月10日以前に比べ気温上昇が顕著であった。大阪と神戸の間にある武庫川の気温もまた大阪、神戸のそれと同様に上昇したものと思われ、それが越冬場所からの離脱を促したものと思われる。なお、西宮市上大市5丁目では個体数を数えた前述の新聞紙にいなくなったが、それまで数頭しか見られなかった護岸の割れ目に3月22日には100頭程度の群が数群見られ、3月28日にはこれまで1頭も見られなかった新聞紙中に数十頭が見られた。これらはいずれも前述の個体数を数えた越冬場所から移動して来たものと思われる。この時期には越冬場所を離れたとしても、また越冬場所に相当した場所には入り込むものと思われる。

一方、伊丹市西野における倒木の樹皮下、捨てられた断熱材中、同じく断熱材とベニア板の間などでは4月10日頃になっても移動の気配はなかったが、4月23日には殆んどが移動してしまっており、残存しているのはごく僅かになっていた。4月25日は快晴で、大阪の最高気温は24.8℃、神戸の最高気温は23.4℃に上昇しており、武庫川の気温もこの程度に上昇したことは間違いのないと思う。この日、天神川合流点付近において本種の活発な活動が見られた。ここでは越冬場所およびその付近の雑草上で、単独、数頭または数十頭の群が幾つか日光浴をしていた。初めは静止しているが、やがて活発に動き始め、茎の頂部や葉先へ行き、飛び立って行った。食

草であるガガイモはまだ発芽しておらず、ヤエムグラ及びノヂシヤの花上で吸蜜するものが見られた。なお、ヤエムグラの茎から吸汁するものも見られたが、極めて短時間であり、吸汁跡が残るようなことはなかった。

5月5日、伊丹市西野および西宮市上大市5丁目ではガガイモが発芽し、早いものは葉を2枚程度、全開させていた。本種は新芽および白毛が残っている全開しない葉表に集っており、単独または数頭ないし十数頭程度の群をなして吸汁していた。そして、はげしく吸汁された新芽は白汁を吹き出し、それが黒化して固まっているものもあり、はなはだしいものはしおれて成長を止めていた。ガガイモへ転移せず、他の雑草上で日光浴しているものも多くおり、いずれにおいても交尾中のものが多い。交尾中は雌雄共、後脚腿節端を腹部側面に打ち付けるようにして前方から後方へせわしく動かしていた。5月7日以後、腹部が肥大した雌が見られるようになった。5月9日には、腹部の肥大した雌が交尾状態のまま、ガガイモの茎を通して地上へ下りるのが見られた。ガガイモは5月初旬から6月初旬にかけて順次、発芽し、新しい莖を伸長させた。越冬場所を離れた本種もまた新たに発芽したガガイモの特に新芽に順次、集まった。しかしながら、ガガイモの発芽前に飛び去ってしまうものが多いためか、大群が越冬していた場所の近辺であってもガガイモ上で見られる本種は越冬前のような大群ではなく、個体数は多くなかった。越冬態勢にはいった頃、少数の幼虫が見られたが、越冬後は全く見られなかった。越冬後の本種は5月中はガガイモ上でよく見られたが、6月にはいるとほとんど見られなくなった。

(4) 新幼虫の発生

越冬後、再出現した成虫は産卵のため新芽や葉から去ったものと思われたので、茎、根際、根に近い成長した葉裏、涸れた新芽の中などを探したが、卵は発見できなかった。また、1~2令幼虫も中々、発見できなかった。ところが、7月15日に西宮市上大市5丁目の河川敷内で3令以上と思われる幼虫群を数群発見した。また、7月18日には尼崎市南武庫荘12丁目、西宮市戸崎町および同甲子園口北町の堤防で同様の幼虫群を発見した。殊に、尼崎市南武庫荘12丁目では、既に成虫群が1群みられ、1頭の成虫はヒメジョオンの花上で吸蜜していた。この時期にも単位と思われる小群のほか、同令または令数の異なる幼虫の混生群も見られたが、秋期のような大群は見られなかった。以後、幾つかの群について個体数を調べることにしたが、その結果を(5)項に示す。

越冬後に出現した成虫による産卵状態およびその孵化による幼虫の生態を観察できることを期待したのであるが、前述の通りの結果となった。このように卵および幼虫の期間を野外観察で早急に明らかにすることは困難であると思われたので、捕獲した幼虫または成虫を飼育して観察することにした。その結果は(6)項および(7)項を示す。

(5) 群中の個体数

1982年中に計数した群中の個体数は次の通りである。

番号	計数月日	場 所	頭 数	備 考
1	2月20日	西宮市上大市5丁目	1351頭	越冬中の成虫群
2	7月18日	西宮市戸崎町	47頭	令数異なる幼虫の混成群
3	"	"	32頭	同令幼虫群
4	"	"	69頭	令数異なる幼虫の混成群
5	"	尼崎市南武庫荘12丁目	47頭	"
6	"	"	35頭	成虫群
7	7月20日	西宮市上大市5丁目	25頭	同令幼虫群
8	"	"	31頭	"
9	"	"	55頭	令数異なる幼虫の混成群
10	"	"	38頭	成虫群
11	"	"	41頭	令数異なる幼虫の混成群
12	10月10日	西宮市戸崎町	35頭	同令幼虫群
13	"	伊丹市西野	35頭	"
14	"	"	49頭	"
15	"	"	46頭	"
16	"	"	59頭	"
17	"	"	98頭	令数異なる幼虫の混成群
18	"	"	142頭	"
19	"	西宮市戸崎町	1016頭	幼虫成虫混成群
20	"	尼崎市南武庫荘9丁目	28頭	終令幼虫群
21	"	"	21頭	"

(6) 飼育中の各令幼虫の期間

8月28日に宝塚市小浜1丁目でガガイモの茎にいた1令と思われる幼虫18頭を捕獲し、Aグループ10頭およびBグループ8頭に分け、それぞれ別々のシャーレに入れ、明るい窓際で飼育した。

A グ ル ー プ

8月30日 5頭第1回目脱皮, 2頭死亡。

8月31日 1頭死亡。

9月3日 2頭第1回目脱皮, 5頭第2回目脱皮。

- 9月8日 2頭第2回目脱皮, 5頭第3回目脱皮。
- 9月15日 2頭第3回目脱皮。
- 9月16日 1頭第4回目脱皮。
- 9月17日 4頭第4回目脱皮。
- 9月22日 1頭第4回目脱皮。
- 9月23日 1頭第4回目脱皮。
- 9月27日 1頭第5回目脱皮(羽化)。
- 9月28日 4頭第5回目脱皮(羽化)。
- 10月4日 1頭第5回目脱皮(羽化)。
- 10月7日 1頭第5回目脱皮(羽化)。

B グループ

- 8月31日 2頭第1回目脱皮。
- 9月1日 2頭第1回目脱皮, 3頭死亡。
- 9月2日 1頭第1回目脱皮。
- 9月4日 3頭第2回目脱皮。
- 9月7日 1頭第2回目脱皮。
- 9月8日 1頭第2回目脱皮。
- 9月8日 3頭第3回目脱皮。
- 9月13日 1頭第3回目脱皮。
- 9月15日 1頭第3回目脱皮。
- 9月17日 3頭第4回目脱皮。
- 9月20日 1頭第4回目脱皮。
- 9月23日 1頭第4回目脱皮。
- 9月28日 1頭第5回目脱皮(羽化)。
- 9月29日 2頭第5回目脱皮(羽化)。
- 10月3日 1頭第5回目脱皮(羽化)。
- 10月8日 1頭第5回目脱皮(羽化)。

各個体を一頭ずつ識別せず、グループとして観察したので、どの個体がどの日に脱皮したのかは分らないが、早く脱皮したものは次の脱皮も早く行なったものと仮定すると、2令以降の幼虫については、2令が4～5日、3令が4～7日、4令が8～9日、5令が11～15日であった。ただし、これより遅い時期の飼育例では2令幼虫に7日を要しており、同じ令数でもその期間は時期によって異なるものと思われる。また、令数が増えるとその期間が長くなった。

(7) 産卵から羽化までの飼育例

8月28日に宝塚市小浜1丁目で腹部が豊満になった小形の♀1頭を捕獲し、シャーレに入れ、明るい窓際で飼育した。シャーレの底にはちり紙を敷き、ガガイモの葉および桜の枯葉を入れた。8月30日にガガイモの葉で覆われたちり紙上に33卵が固めて、ただし積み重ねることなく、産み付けられていた。卵は長径約0.8ミリ、短径約0.4ミリの略回転楕円体、色は半透明の橙色でダッシュ記号状(*)の赤色斑点数個が不規則に散在していた。以下、産卵から羽化までの経過を示す。

- 8月30日 産卵。
- 9月4日 色が淡くなった。
- 9月9日 色が濃くなった。
- 9月12日 産卵した成虫死亡。
- 9月17日 孵化、ガガイモの葉に集まらず、新芽に集まる。
- 9月26日 第1回目脱皮。
- 10月3日 第2回目脱皮。
- 10月10日 9頭第3回目脱皮、(途中、6頭紛失および死亡)。
- 10月11日 18頭第3回目脱皮。
- 10月19日 12頭第4回目脱皮。
- 10月20日 14頭第4回目脱皮。
- 10月21日 1頭第4回目脱皮。
- 11月9日 5頭、11月11日 5頭、11月12日 2頭
- 11月13日 6頭、11月14日 3頭、11月15日 1頭
- 11月16日 1頭、11月17日 1頭、11月18日 1頭
- 11月19日 1頭各第5回脱皮(羽化)。

各令幼虫の期間は先の飼育例より一般的に長かった。1令幼虫および2令幼虫の期間は全数同じであったが、3令幼虫以降は同じでなくなった。特に5令幼虫では随分大きな日数差ができた。各個体の発育に初めは差がなく、漸次、差が出て来るためと思われる。特に5令幼虫の時期は10月下旬～11月中旬であったが、これまでに比べて活動が鈍ったのが目立った。10月下旬～11月中旬にかけて大阪および神戸の最高気温を調べたところ、最高気温は20℃以下に下る日が多く、最低気温は時には5℃近くまで下ることがあった。飼育場所の気温も大体、同傾向であったものと考えられ、このような気温低下のため、本種の幼虫の吸汁活動は鈍くなり、その期間が長くなったものと思われる。

Ⅲ ま と め

前回の報告時に今後の観察課題としていたもののうち、産卵場所など分からなかったものもあったが、かなりの部分がわかって来た。ガガイモの生育場所および本種の発生場所共、消長はあったが、全体として1981年より多かった。ただし、これらの場所が必ずしも増加したのではなく、広い堤防のことなので、極く少数しか生えていなかったため、または除草直後のため見落していたものなどが、新たに見付かり、それらで発生していたものが見付かったに過ぎないと思われる。また、武庫川以外の発生箇所は2箇所共、武庫川近辺であったが、武庫川近辺およびもっと離れた他所で今後、見付かるかも知れない。本種は武庫川において年2化と考えられる。群によって発生の時期がかなりずれるようであり、越冬中でも日光浴のため越冬場所から出ているものを見られるので、武庫川では年中どこかで見付けられそうである。飼育により卵自体は分ったので、これを目安にして是非とも産卵場所を見付けたい。なお、更に興味ある知見が得られると思われるので、これらと共に追ってまた報告させていただく。

キオビホオナガスズメバチ千種町に産す

奥 谷 禎 一

キオビホオナガスズメバチ *Dolichovespula media* は、中部山岳地帯より北部日本にしか分布していないものと思っていたら、1981年佐用町船越の内海功一氏からその巣と破損した1♀(千種町西河内産)が送られてきて、兵庫県にも産することを知った。その後、1982年に西河内の池田和生氏より、詳細な連絡をいただき、同地に分布していることがわかった。同氏の御諒解を得られたので、氏の観察結果を記しておく。

1982年には3巣を発見、今までに通算7巣を見つけている。現在判っている分布域は、西河内だけである。

本種の活動は6月中旬頃よりはじまり、営巣し、8月下旬～9月上旬に巣から離れる。本種の巣は、他のスズメバチ同様な数層の巣盤をつくるが、その数は少ないらしい。巣は多くは灌木の枝につくられ、数枚からなる外房は灰色をしており、外側は縞模様が見られるが、スズメバチ類と異り鱗片状にはならず、薄い膜状である。巣は7月16日観察したもので、径7～8cm、働蜂数約20、単層であった。8月31日観察では、径約15cmで、写真撮影後の台風15号が巣離れを促進したのか、翌朝は空であった。攻撃性は弱く、小型のアシナガバチぐらいである。

1982年9月に得た最大の巣は次の通りであった。

外 房：縦約30cm, 直径約24cm

内 層：3層

	最上層	第2層	
層 径	126 cm	125×120	80×76
房 数	428	398	209
房 径*	4 mm	6 mm	5.6 mm

* 房径は六角形の平行面の計測値。

この房径から推定すると越年雌は第2層に生じると考えられる。

その後、本種の分布について三重大松浦誠氏に伺った所、発表はないが九州・四国の高地にも分布しているとのことで、兵庫県が分布の西限ではないことを知った。このような比較的大型のハチでも分布状態がよくわからないとは、誠に残念である。

終りに、情報を提供された池田和生氏並びに分布の御教示賜った松浦誠氏に厚く御礼申上げる。

ハ チ 類 の 方 言

奥 谷 禎 一

近年は図鑑などが普及し方言を用いることが少なくなったが、地方誌の記録として方言も必要ではないかと思うので、千種町西河内の池田和生氏からよせられた方言を記録しておく。方言である以上正確にどの種を指しているかははっきりしない点もあるが、ことわりのない限り千種町あたりの方言である。

おおぐろ：スズメバチ又はヒメスズメバチ

こぐろ：ヒメスズメ又はコガタノスズメバチ

すずめにか：スズメバチ

以上の3種の総称は“くろにか”

あかにか：キイロスズメバチ

あわい：クロスズメバチ

“つちばち” “ささばち” と称する人もある。

おおあしだれ及びあしだれ：セグロアシナガバチ又はキイロアシナガバチ、おおあしだれは後者を指すらしい。

まめのこ：キボシアシナガバチとコアシナガバチ

ささばち：ホソアシナガバチとヒメホソアシナガバチ

じばち：ジガバチ等単独で地中に営巣するハチ類

じみつ：ニホンバチ（在来種ミツバチ）

どんごろ：ケブカハナバチとクマバチ

つちばち：マメコバチやトックリバチなど泥を運ぶハチ類

おみきすず：スズメバチ類（くろにか、あかにか）の越冬雌がつくる初期の徳利状の巣

にかのす：上記のものが球形になった巣

あつさぎ：フタモンアシナガバチ（一宮町）

あるいはアシナガバチ類全体のことも知れない。

なお、千種町あたりでは、スズメバチ類の幼虫を食用にする。また、“あしだれ”は足垂れ、“あつさぎ”は足下の意味らしい。

終りに、これらの方言を御紹介頂いた池田和生氏に深く感謝の意を表する。

神戸市山田町の蛾（続報Ⅱ）

松 本 健 嗣

採品の分類整理がまだ出来ないので、今回も相変らず陳腐な手法であるが若干の種を披露させて頂く。

1. ヒトスジオオメイガ *Schoenobius lineatus* Butler

1979年7月30日 1 ex. 北区山田町字藍那

1983年7月8日 3 exs. 同 上

三化メイ虫イッテンオオメイガと同属であるが、藍那では7月に水田上でよく見かける。局地的なものだと言う。

2. サビイロナミシヤク *Pseudocollix hyperythra* Hampson

1983年5月23日 1 ♀ 字藍那

暖国の照葉樹林のものらしい。

3. イチゴキリガ *Orbona fragariae pallidior* Warren

1983年4月12日 1 ♂ 字藍那

成虫越冬種。西日本では余りとれないらしい。

4. カマフリンガ *Macrochthonia fervens* Butler

1981年9月27日 1♂ 字藍那

1983年8月7日 1♀ 北区ひよどり台町

1983年8月11日 1♂ 同上

別に珍しい種ではないが新興住宅ひよどり台町では街路樹のケヤキに幼虫がついているのをよく見る。

5. アサマキシタバ *Catocala streckeri* Staudinger

1983年5月28日 2♂♂ 字藍那及び坂本

日本産 *Catocala* 属 29種は大概暑い盛りに出るものだが、本種のみは新緑の候の出現する。

1 ex. は小学校近くの灯火下で、他の 1 ex. は丹生山へのハイキングコースのコナラ林で採集したものである。小生本種を 1964年5月30日少し東方の宇原野初田川で採集して以来 20年目の再会であった。アムール系の種で西日本では他に滋賀、大阪、岡山、香川の諸府県より夫々ヶ所産地が知られている。

6. ネグロアツバ *Zanclognatha nigrobasalis* Yamamoto et Sugi

1983年7月6日 2♂♂ 字藍側

1955年山本義丸先生が杉繁郎氏と共著で氷上郡柏原町で飼育により得られた標本をタイプとして記載された種である。蛾類通信 No. 70 (1972) には西は柏原町から東は栃木・茨城県迄 20ヶ所の既知産地が記されている。藍那は兵庫県では 2番目の産地ではないだろうか。幼虫は藓を食べ、採集場所は自動車道をくぐる地下道内なので、同所にやたらに多いホシオビコゲ同様そこで発生したものかもしれない。

神戸市周辺の蜻蛉目付記

松本健嗣

本誌 Vol. 10 No. 2 (1982) で神戸市周辺のトンボについて述べたが、これは過去にいたものであるが、当然語るべき重要な種を一つ逸したことに気付いた。またヤンマの産卵習性の説明に明らか

な誤りがあったので、訂正とともに今少しトンボについて話をさせて頂く。

まず、宝塚昆虫館には西宮市鳴尾V-1936のラベルのついたベッコウトンボの標本が所蔵されている筈である。採集者の柴田慶蔵氏（大阪市在住）には先年お会いし、当時の模様を聴く機会を得た。ベッコウトンボと言え、加古川方面の低湿地、丘陵が多産地として知られていたが、本種は日本からは殆んど姿を消したとも言われ、残念ながらこの方面でも最早絶望的であろう。小生昨年5月、以前（1971年頃）多産した小野市鴨池、加西市志方七ツ池を訪れたが本種の姿は見られなかった。風致地区であり、環境は見たところ以前と少しも変わっていないのだが。次にネアカヨシヤンマの産卵習性であるが、親メスはセリの茎に卵を産むと記したが、これは小生の思い違いでVol.10 No.1 に記されているコケ、湿土上に産卵すると言う田中稔氏の観察が正しい。小生の誤認を陳謝する。それからサラサヤンマについても泥上の枯板、ハンノキの根に産卵すると記したが、これは組織内ではなく、それ等に附着した土に産んでいたか、或いは産もうとしたが好的な物体でないので産まずに飛び去ったとも考えられる。更に六甲山系の溪流がムカシトンボの棲息に適さない理由の一つとして溪流の傍に親メスが卵を挿入するフキ、ワサビ等葉柄の長い草本が生じていないことを挙げたが、今年日本蜻蛉学会の方からムカシトンボは葉柄ばかりでなく、地表の苔に産卵することが最近判明したとのご教示を頂いた。お恥しい次第であるが、小生蜻蛉目の行動習性は大雑把にしか観ていなかったらしい。それになんとも言っても神戸辺りでは上述のような珍しいトンボを観察できる場所は最早なくなってしまった。たゞアオヤンマだけは明石城やぐら北側の蓮池で今年の夏も沢山見た。

青蜻蛉 花の蓮の胡蝶かな 素堂

眼には青葉山ほとゞぎすの秀句で知られる、山口素堂（1642-1716）の作であるが、これはその晩年江戸深川の自邸で詠んだものといわれる。（1983-Ⅷ-16記）

伊丹市内におけるナガサキアゲハの採集および観察記録

新 家 勝

1980年以降、阪神間各地におけるナガサキアゲハの採集が、新聞紙上で度々、報じられているが、伊丹市内のものはみられない。筆者は1982年5月9日に伊丹市昆陽池公園のタニウツギの花に1羽が飛来したのを目撃しており、今年は採集できることを期待して5月8日に同所を訪れた。ところが、タニウツギは剪定され、花が少なく、ナガサキアゲハは飛来していなかった。その帰途、同所の北北

西約1kmにある素戔鳴神社(伊丹市鴻池)に立ち寄ったところ、数頭(翅の破損状態の視認による推定)の♂が飛び回っているのに遭遇した。この神社の境内には高さ10mを超えるクスノキ、アラガシ、シイ、ヒノキなどが多数、繁茂し、その間に蝶道が形成されており、ナガサキアゲハのほかクロアゲハが目撃された。記録のためナガサキアゲハ1♂を採集したが、かなり破損していた。この境内にはナツミカン数本が栽植されており、クロアゲハが産卵していた。ナガサキアゲハの発生を確認できることを楽しみにして5月15日、同21日および同29日に同神社を訪れたが、♀の飛来と産卵行為および幼虫は目撃できず、同29日には♂の姿が消えてしまった。夏型が発生するものと推定される7月10日頃より毎週土曜日または日曜日には同神社を訪れたが、夏型は♂♀共目撃できなかった。同神社において春型♂を多数目撃できたのは偶然のことであったかも知れないが、ナガサキアゲハは阪神間にほぼ定着したと見られており、伊丹市内でもどこかで発生しているものと推定される。同神社近辺で発生を確認できることを楽しみにしている。

西宮市内におけるチビサクラコガネの採集記録

新 家 勝

本誌第11巻第1号の「神戸産珍奇なコガネムシ数種の記録」によれば、チビサクラコガネおよびオオサカスジコガネの兵庫県下での採集記録は少ないようであるが、筆者の長男の標本中にチビサクラまたはオオサカスジとおぼしきコガネムシ2頭があったので、1983年8月28日に神戸大丸で開かれた神戸生物クラブの同定会に持参し、高橋寿郎氏に同定していただいた。その結果、チビサクラコガネと判明したので報告させていただく。

- (1) 採 集 日 1975. 6. 21
- (2) 採 集 場 所 西宮市樋ノ口町1丁目、国道171号線下の地下道燈火。
- (3) 採 集 頭 数 2 頭
- (4) 採 集 者 新家邦紹

春先に多くいるムネアカテングベニボタル (兵庫県甲虫相資料・134)

高 橋 寿 郎

毎年春分の日前に市内の舞子墓地に墓参に行った帰り道、付近を何か虫が見当たらないかと歩いて見るのが楽しみの一つである。此処2年程松の樹の切株の所にムネアカテングベニボタル *Konoplatycis otome* (Kōnō, 1932) が鮮かな緋色をしてかたまるとまっているのに出会った。そばの松の朽ち木をくずして見ると樹皮下から出て来たのもいた。幼虫らしきものは見られなかった。陽の当る所に止まっていて余り動かなかった。この時期に成虫として羽化して出て来るのだろうか、極めて鮮かな緋色を呈しているいかにも今羽化しましたと言うようなあざやかさである。他の野外での採集でも比較的早い時期に得られている。

この種は河野広道博士が *Platycis otome* として産地を Honshu とのみ記して記載された種である (*Ins. Mats.*, Vol. 7, No 1/2, P. 59, 1932)。中根博士はこの種をタイプに新亜属 *Konoplatycis* を創設された (1969)。後大図鑑追補, 正誤表 (1978) では *Konoplatycis* 属としておられる。

分布は本州, 四国, 九州, 対島が知られていて兵庫県下からは中根博士も Takarazuka, Okanomura (多紀郡岡野村) を記録しておられ, 洲本市三熊山 [N. Hirochi etc, 1977], 氷上郡春日野 [高橋, 1960] の記録がある。筆者自身は津名郡岩屋 (1♂, 29-IV-1969), 神戸市広野 (1♂, 10-IV-1955) で採集している。この舞子での採集は次の通りである。

9♂♂, 3♀♀, 16-III-1982, 4♂♂, 1♀, 17-III-1983。

尚, 蜂谷幸雄氏が屋久島で採集された若干の甲虫類を御恵与下さったが, その中に本種の 1♀ (24-III-1970) が入っていた。屋久島からの記録は今迄無かったと思われる。採集時期が大変遅いが美しい色をしている。

ベニボタル科の生態に就いては, 余り詳しい報告は見当たらない。有名な "三葉虫型幼虫" (*Trilobite larva*) に就いては福田氏 (1956), 阪口博士 (1981) によって図説されているが, 日本産のこの科のもので幼虫が図説されているのは, クロベニボタル *Cladophorus geometricus* (林, 1954, 1959), *Cautires* sp. (福田, 1959), クロハナボタル *Plateros coraeinus* (林, 竹中, 1960), ヤマトアミメボタル *Xylobanus japonicus* (竹中, 1962) の4種位である。林博士は他に枯木に生息するホタル上科の科の検索表でベニボタル科幼虫の特徴を記しておられる (1981)。いづれにしる飼育が大変むづかしい仲間だこれ等の生態解明することは仲々大変だと思ふ。

今迄の幼虫の記録から見て成虫になるのは4月下旬以後のようで, 3月の中旬に成虫になると言う

例は見当らない（成虫越冬にしてはどれも鮮かな個体ばかりであった）。このような成虫出現期は始めてのように思われる。

コデマリ（小手毬）の花に集るコジマヒゲ
ナガコバネカミキリ
（兵庫県甲虫相資料・136）

高橋 寿郎

コジマヒゲナガコバネカミキリ *Glaphyra kojimai* (Matsumura, 1939) (小島圭三博士が横浜本牧で採集された1♀で *Epania kojimai* として記載された。Ins. Mats., Vol. 13, No. 2/3, P. 56, 1939) は兵庫県下では広く分布し、個体数も割合多く採集されているようである。

たゞし神戸市内からの記録は今迄見当らなかった。最近身近の所に多くいる種であることがわかったので、此処に報告しておきたい。

神戸市兵庫区鶴越筋夢野大師福寿院のそばに公園として休息場が設けられていて巾1m、長さ20m位にわたってコデマリ (*Spiraea cantoniensis* Lour.) が植えられている（海拔約198m）。この開花期4月末から5月初めには無数のツヤケシハナカミキリが集ってくる（勿論他にもポビューラな仲間も多く集ってくる）。ツヤケシハナカミキリの方は♀の色彩変化に名付けられている異常型と言うのも結構見られる。大変活潑に飛びまわっている。これに反しコジマヒゲナガコバネカミキリはコデマリの花の中にもぐり込んだりとまっているが、動作は大変のんびりしていて手でさわってもゆっくり手の平に落ちて余り逃げようとしめない。花粉を身体につけているものが多い（ツヤケシハナカミキリの方はとまっている所へ手をのばすと素早く飛び去ったり下へ落ちたりする）。

かなり多くのこのコジマヒゲナガコバネカミキリがコデマリの花に来ているわけで1983年5月3日から5月12日までに14♂37♀が採集出来た。案外身近の所を注意すると普通に見られる種なのかもしれない。5月3日～5日頃が最盛期のように5月12日に見られたのが最終だった。尤も調べた時間帯が午前9～10時の1時間づつであるから午後になると状況も違ってくるかもしれない。それと案外と♂の方が♀に比して飛来している個体が少ないように思われる。

カエデ、サンショウ、ウシコロシなどの花上とかミズキの枯木で得られるとか、幼虫はミズキ、キブシ、モミにいたると言われている（草間，1972）。林・小島両博士によるとソヨゴの枯枝に6月頃産卵され、幼虫は10～11月に老熟し、11月下旬に蛹になって越冬、翌年4月中旬羽化しばらく材中にて孔道を通って外に出ると（1974）。

末文になって申し訳ないが、このコジマヒゲナガコバネカミキリは林 匡夫 博士に同定して頂いた。厚く御礼申しあげる。同時に学名も同博士の御教示で従来の *Molorchus* 属でなく *Glaphyra* 属とした。

クビジロカミキリ神戸市内に産す (兵庫県甲虫相資料・137)

高 橋 寿 郎

クビジロカミキリ *Xylariopsis* (*Xylariopsis*) *mimica* Bates, 1884 (模式標本, 中禅寺, 札幌) は日本全国 (屋久島もふくむ), 朝鮮, 中支那, 満州とに分布しているが, 必ずしも多く産する種では無さそうである (青森県から初記録としてエゾエノキの根元の枯葉の下から越冬中のものが採集出来たと, 佐藤, 1983)。

兵庫県下からは従来宍粟郡の赤西が知られているのみで県下産としては珍しい種のようなのである。1983年5月8日神戸市内烏原貯水池畔で長い網で樹木の枝先を拘って1♀が入ってきた。樹種は確認出来なかった。温帯林帯のツルウメモドキに集まり, 幼虫はこれを食べると言われている。一応記録として報告しておき度い。はっきりした色彩をしているので同定の間違いは無いと考えられる (最近赤西のツルウメモドキから得たこの種の蛹を黒田祐一氏は図説しておられる, 1983)。

兵庫県下でのイガラシカッコウの分布 (兵庫県甲虫相資料・138)

高 橋 寿 郎

イガラシカッコウ *Tillus igarashii* Kōno, 1930 は北海道定山溪で採集された1♀ (3-Y-1928, K. Igarashi leg.) に基いて河野広道博士が図をつけて記載されたものである (*Trans. Sapporo Nat. Hist. Soc. Vol. XI, pt. 3, P.134~135, Fig.1, 1930*)。種名には採集者名が用いられている。

その後カッコウムシ科を研究しておられた伊賀正汎氏が鳥取県大山産で原色図説をされた (1955)。その時稀な種で燈火に飛来することがあるとされ, 大阪府能勢, 九州英彦山の産も記録しておられる。

中根博士の図説(1963)もあり、林 長閑博士も原色で図説しておられ(1975)、成虫、幼虫、ともに昆虫を捕食するものと思われると記しておられる。

ところで、兵庫県下での記録は三木 進氏のものが始めてあると思われる(きべりはむし, Vol. 5, No. 1/2: 17-18, 1977)。三木氏の記録は野外での採集でなく、三田市でネムノキ枯枝から羽化したものである(28-IV-1975)。その後全く記録は無かったように思う。筆者は1980年6月10日神戸市内の烏原で叩き網で1♂を採集した。以上2つの記録は一応発表しておいた(Irattsume, No. 6, P. 38, 1982)。本年も1♀を烏原で採集出来た。これも網で樹の枝先をすくって得たものである(1983年6月1日)。

前にも書いたようにハムシダマシに良く似ているので見逃されているのではないだろうか、県下にはもっと他の地にもいると思われる。今の所2ヶ所しか知られていない。まして生態の片鱗もつかめていない。なんとか調査をして見たいものだとつねづね考えている種の一つである。

ムネアカチビナカボソタマムシ神戸市内に産す (兵庫県甲虫相資料・139)

高 橋 寿 郎

1983年7月4日神戸市烏原で灌木を叩いて採集していたら始めて見るタマムシが入って来た。帰宅後調べて見たらムネアカチビナカボソクマムシ *Nalanda rutilicollis* (Obenberger, 1914) の♂であることがわかった。可成り分布の広い種であるが、本州では関東以西に見られる種のように幼虫はアカメガンツを食べるとなっている。所で筆者の調べた範囲では兵庫県下からの記録の無い種であったので、此処に記録しておきたい。

イボタサビカミキリ兵庫県下での記録 (兵庫県甲虫相資料・140)

高 橋 寿 郎

イボタサビカミキリ *Sophronica obrioides* (Bates, 1873) は Bates が長崎を産地に *Lasiapholes* 属で記載されたカミキリである(Ann. Mag. Nat. Hist. (4) XIII, P. 382)。

兵庫県下からの記録は戦前 関 公一氏が *Lasiapholes obrioides* の学名で1941年住吉村（自宅）を採集地として記録されたのが初めてだと思われる（昆虫界, № 89, P.455）。データはついていない。この記録を発表された時、関氏のお宅は武庫郡住吉村字瀬川1302になると思われる（昭和14年のお手紙が手許にあるし昆虫界, № 88, 1941にもこの住所が出ている）。確か住吉小学校のそばであったから今の住吉東町になるのかもしれない。何回かお邪魔したことがある。近所に米谷正司氏のお宅もあった。当時はまだまだ淋しいと言うか余り人家が建て込んでいなかった時代である。しかし何分にも記録としては古いものである。

戦後美方郡浜坂での記録が高橋 匡氏によってされている（Iratsume, № 4, P.23, 1980）。たゞこちらでもデータが無く場所も漠然としている（このように珍しい種に就いては簡単なコメント及びデータ等は是非つけて頂きたいものである）。穂積氏はこの記録が日本海側の東端の記録になるとされている（昆虫と自然, 16巻, 10号, P.10, 1981）。

県下の記録は以上があるだけで少くとも県下では珍品に属するように思われる。

実は筆者1963年6月30日1♂を市内の鳥原で採集していたのであるが、今1つ同定に自身もてずそのままになっていた。所が1983年になって同じ鳥原で7頭採集することが出来て本種に間違いないことがわかったので此処に報告しておきたいと思う（1♀, 14-VI-1983, 1♀, 22-VI-1983, 1♂, 1♀, 23-VI-1983, 1♂, 1♀, 23-VI-1983, 1♂, 13-VII-1983）。

1963年の方の採集はどのようにして得たか、記憶にないが1983年のものは道路上に大きく張り出したコナラにたくさんのテイカヅラがまつわりついてそれを網で無闇矢鱈にゆさぶって採集したものである（植物の同定をして下さった岡村はた博士に厚く御礼申しあげる）。貯水池畔の舗装された道路につき出たようにして延びているコナラの樹をゆすっていると朝の登山会の連中がよって来て“何をとっています”と五月蝿いこと。長い柄の網で毎日の様に山に出掛けるが会う人々が大体“何をとるのですか”との質問攻めに会う。貯水池が近くにあるから“魚をとるのですか”この網では魚をとれない。“鳥をとるのですか”鳥がとれたら面白いだろうが—。“虫をとります”と言うと“なるほど鳥の餌とりですか”。日本人の昆虫採集に関する理解度はこの程度である。約50年間進歩していない。閑話休題。

この種に就いては小島, 林両博士が“4-8月暖帯林帯のつるの枯れたもの集る”と書いておられる（1969）。案外と多くいるのではないだろうか。灯火にも飛来すると書いておられる。

ところで、林博士が“あらげかみきり族”の解説をされた報文中で（Nature Study, Vol 5, № 4, P.48-50, 1969）、キイロアゲカミキリ *Penthides rufolanus* (Hayashi, 1957) が“兵庫県下で発見されたと言う”との記録をしておられる。この種が兵庫県に産するとされたのは実はこの報文が唯一のものゝようで（辻氏が言及されているのもこの報文によったものではないだろうか。月刊むし, № 10, 1972）、詳しいデータを見たことが無い誰か兵庫県での産に就いて御承

知の方があれば御教示頂きたいと思っている。

兵庫県産蝶類に関する一番古い文献

高 橋 寿 郎

筆者は1982年姫路昆虫同好会機関誌“てんとうむし”№8誌上に“兵庫県産蝶類に関する文献目録”を発表させて頂いた。最近八王子市の猪又敏男氏から兵庫県産蝶類に関する一番古い文献と思われるものとしてその報文のコピーをわざわざ御送り頂いた。拝見した所成程神戸からの5種の蝶の記録がふくまれているもので文献としてはやはり一番古いもの、ように思われるので此処に紹介すると共に猪又氏の御好意に対して厚く御礼を申しあげさせて頂きたい。

1882. A. G. Butler. On Lepidoptera collected in Japan and the Corea by Mr. W. Wykeham Perry.

Ann. Mag. Nat. Hist. (5)9: 13-20

表題のごとくW. W. Perry が日本と朝鮮で採集した標本をBritish Museumに寄贈したものに基き同博物館のA. G. Butlerがまとめた報文である。4新種の記載(全部朝鮮産であるが、1種のみ函館産1♀がふくまれている)をふくむ38種の蝶が記録されている(図は無い)。

日本では函館、横浜、神戸で採集したとある。採集者のPerryに就いてはどの様な人であったのか、筆者にはよくわからない。神戸からの採集品はButlerにとっては初めての資料であったが、たいして興味のあるものはいなかったと始めに書いている。採集が全部1881年(明治14年)7月であり、この時代の神戸とは恐らく海浜にのぞんだ平地でごく未開の平凡な地(山地では採集していないと思われる)での採集だと考えられるから採集時期と共に条件が大変悪く、期待する方が無理であろう。

神戸からの記録は次の種である。

p.14. (2). *Satyrus bipunctatus* Motschulsky ジャノメチョウ

現在日本産は*Minois dryas bipunctatus* Motschulskyとされている。

p.17. (7). *Everes hellotia* Ménétrières ツバメシジミ

現在日本産は*E. argiades hellotia* Ménétrièresとされている。

p.17. (19). *Lycaena argia* Ménétriès ヤマトシジミ

種子島, 屋久島から北の地域に分布するのは *Pseudoziecra maha argia* Ménétriès と
言うとのこと。いたる所に多くいると記してある。

p.17. (20). *Chrysophanus timaeus* Cramer ベニシジミ

日本産は *Lycaena phlaeas daimio* Seitz とされる。

p.18. (21). *Colias poliographus* Motschulsky モンキチョウ

日本産は *Colias erate poliographus* Motschulsky とされる。

以上, 神戸産は5種でごく普通に見られる蝶ばかりであるが, 一番古く記録されたものとして貴重
だと思われる。神戸産については7月採集とあるだけでコメントもついていなく, 詳しいデータもな
い。(現在の学名については, 川副・若林, 1976によった)。

県関係文献紹介

- 高橋寿郎 丹生山系の自然（昆虫）シンポジウム芦谷川報告集 p.13-18（北神戸の自然と文化を守る会刊，B5，36 p.）。

1982年9月23日北神戸の自然と文化を守る会の主催で兵庫県教育会館五階大ホールにてシンポジウム芦谷川が開催された（13～17時）。その時“丹生山系の昆虫”と題して講演させて頂いたものがこの中に収録されている。録音から編集されていて演者に草稿を見せて貰えなかったものだから編者が意味をとり間違った箇所が少なからずあるのは残念に思われる。

尚，同様の内容で筆者がまとめた“芦谷川溪谷のこん虫”と題する報文が“自然保護のひろば” No. 3, pp.9-11 に発表されている。両書とも本来は1982年に出版されるべきものであったが，送られて来たのは1983年4月であった。

- 西村 登，円山川の底生動物。円山^川中流域産主要魚種の食性。

円山川水系の生物生態，pp.163～277，pp.451～470。（兵庫県八咫土木事務所刊，1983年3月）。

相変わらずの西村 登氏の精力的な調査に基く論文である。非常に参考になる。たゞ一般には入手し難いものであることが惜まれる。この様な貴重な論文を御恵与下された西村氏に厚く御礼申しあげる。他に一編水野信彦，日下部有信氏との共著になる“河川改修と漁場の共存策”同書 pp.473～495も御恵与頂いている。

同好会誌

- Parnassius No.28, 29, Insect, No.29, 30（淡路昆虫同好会々誌並びに連絡誌）
1983年5，9月。
- 兵庫陸水生物 Vol.3, No.2, 1983年6月（兵庫陸水生物同好会々報）。

編 集 後 記

- 空梅雨かと思っていると集中豪雨。山陰の皆様には大変だったと思います。心からお見舞いを申しあげます。毎年のように何処かで災害が起ります。つらいことです。梅雨が空けたら猛暑。年々年のせいですか骨身にこたえますこう暑くて虫の方への影響はどうだったんでしょうか。今年は台風が発生も少ないとか、之はエルニーニョ現象のためと言われたりしています。その少ない台風の内第5号はゆっくり北上、上陸後もゆっくり陸地を縦断北上と気象台を手こづらせるような迷走所詮自然現象は現代科学とて解明出来ないことだらけだと思います。
- 今年も身近かでそこそこの結果が得られました。自然は深遠だな々と感心しています。昆虫研究の醍醐味は未知との遭遇です。一文にもならない地方のファウナ解明(?)なんかに眼の色を変えているのは虫が好きなんだからだと自己満足の日を送っています。
- 慢性原稿不足、資金不足で氣息奄奄です。何処まで息が続くかです。次号は1984年5月発行予定です。原稿切は3月末です。御投稿をお待ち致しております。会費の納入も是非是非お願いします。 (T)

きべりはむし 第11巻第2号

昭和58年11月25日発行

発行：兵庫昆虫同好会

〒652 神戸市兵庫区氷室町1丁目44 高橋寿郎 方

振替 神戸5-72052

印刷：(株)文尚堂

〒652 神戸市兵庫区下沢通3丁目4-11
